



特集

「統一合判」

中学入試レポート

vol.

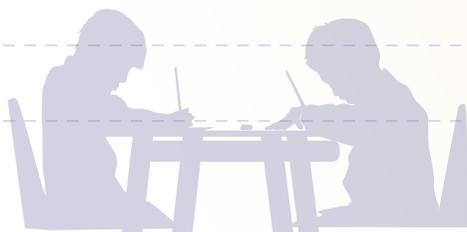
5

いよいよスタートした2016年入試。

これから1年間の受験  
準備と学校選びのために!

年が明けて、いよいよ2016年1月を迎えた。5年生の皆さんは、もうすぐ新6年生として本格的な受験勉強に取り組んでいくことになる。そこで、気分も新たに、これから1年間の確かな学習と受験準備に取り組んでいけるよう、この2016年の入試状況をしっかり見定め、親子でもう一度「さあ、がんばるぞ!」という気持ちを固めていただきたい。

また、お子さんたちが来春2017年の中学入試を経て、それぞれ進学した中高一貫校から大学入試に挑む2022年度には、すでに大学入試のあり方が大きく変化する。その動きも見据えて、わが子にとっての最良の教育環境を考えていただきたいと思う。



首都圏模試センター

## 2016年入試で志望校に挑んでいく、 先輩受験生の姿に多くを学ぼう！

もう2016年2月は目前。現6年生の受験生はみな、最後のがんばりを見せている時期だ。首都圏模試の小5「統一合判」も今回で最終回。次の機会は4月17日(日)の小6「統一合判」の第1回になる。

これからの1年間で、その翌年2017年の入試に挑む現小学5年生にとっての、まさに“勝負どころ”となる。同時に、いま現実の2016年入試に挑んでいく現6年生の親子の姿からは、来年の志望校合格のために非常に多くのことを学ぶことができる。

どうか、これからひと月の間、この2016年入試の状況をじっくりと見定めてほしいと思う。

これまでも入試の話や風景については、塾での保護者会や学校説明会で多くを聞き知ってきたことだろう。しかし、これから半月の間は、まさに現実の(悲喜こもごもの)ドラマが、身近なところで繰り広げられる。何も実際に入試風景を見学に行かなくてもよい。入試に関わるすべてのことに耳を傾け、意識を向けることで、2016年の入試状況を肌で感じ、そこから来春2017年入試に向けて、貴重な教訓や“合格へのヒント”を得ることができるはずだ。

そのためには、入試に関するニュースや、首都圏模試センターのWebサイトでも日々更新状況が紹介される「倍率速報」(1月7日からスタート)などにも注目し、この2016年入試をリアルに感じ取ることが大切だ。

そして入試直後には、各塾が入試情報を収集、分析して発表する「入試報告会」「入試研究会」などにも参加するとよいだろう。そこでは各校の入試状況(競争率や応募者数、合格最低点、入試問題傾向など)が明らかにされるので、現実の入試が「どのようなものか」をつかむうえで参考になる。まず、それを知ることが、その翌春2017年入試に向けての第1

歩とを考えていただきたいのだ。

## 現実の入試の結果には、 合格もあり、また不合格もある…。

このレポートを初めて目にさせていただく1月10日には、すでに茨城や埼玉エリアでは入試が開始されている。続いてすぐに1月20日からは、千葉エリアの入試の幕開けとなる。たとえば、幕張メッセの大フロアを会場に毎年約3,000名規模の入試を実施してきた市川中入試風景は、その様子を目にするだけでも、来年の入試に向けて気持ちが引き締まることだろう。同じ1月20日からは、東京都内の私学で願書の受け付けがいっせいに開始される。

この時期、こうしたことをお子さんと話題にして「入試はこんなふうに行われるんだね」と親子で想像してみるだけで、1年後の入試がぐんとリアルに感じられるはず。そしてそれが何らかの形で、お子さんにとっても、ある種の刺激や励みになってくる。

そして約20日後の2月1日。いよいよ首都圏入試のメインステージの幕が切って落とされる。この日の朝、現6年生の受験生は各自の志望校に向かい、これまで培ってきた力を思い切り発揮すべく、それぞれの志望校の入試問題と正面から向き合うことになる。



2015年2月1日に行われた開成中入試風景。毎年大勢のマスコミが取材に訪れる。



この直前、試験教室に向けて吸い込まれていくわが子の後ろ姿を見守る多くの保護者は、ただひたすらに「どうか十分に力が発揮できますように…」と祈る。そして、合格を願う以前に、自分の足で試験会場に向かっていくわが子の姿に、心配と同時に頼もしさや成長の喜びを感じつつ「今日までがんばってきて偉かったね」、「悔いの残らないようにがんばっておいで…」と願うという。

そして入試が終わると、やがて合格発表。この数年で、入試当日の合格発表を行う学校が非常に多くなったことで、早くも2月1日の夕刻から、合格の喜びと不合格の悔しさが交錯する。

合格の笑顔の影に、不合格の現実を噛み締めて帰路につく親子の姿がそこにある。

こうした入試の現実を、1年後には自らが立ち向かう舞台として真剣に観察する。そこには、果敢に入試に挑み、その結果（合格も不合格もともに）を正面から受け止めようとする先輩受験生の親子の姿がある。その重みは、見ているものに、必ず何か大切なものを感じさせてくれることと思う。

## この1年の歩みが、良い経験になるよう、悔いのない準備を重ねていこう！

入試が“選抜の場”である以上は、そこに合格と不合格という二つの結果があるのが現実だ。実際の入試では、ほとんどの受験生と父母が、合格と不合格の両方を経験することになる。受験した学校すべてに合格するという幸運なケースは、ほんのひと握りだと考えておくべきだろう。

そこで大事なものは、そうした結果を、その都度どう受け止め、それを「良い受験体験」として生かせるかどうかということになる。来年のそのとき、合格も不合格も合わせて、「実り多い受験体験だった」と思えるように、この1年間の歩みをしっかりと計画

し、悔いのない準備をしていただきたいのだ。

もちろん、いまはなるべく目標を高く持って、各自の第1志望校の“合格”をめざして努力していく強い気持ちが必要だ。

しかし、中学受験を通して得られる大切なものは、必ずしも第1志望校への合格だけではない。これから1年かけて、幅広く受験校を探していけば、めざす第1志望校と遜色のない、あるいは別の魅力や特色を持った、価値ある併願校が必ず見つかる。そういう「第2、第3の選択」を、保護者の広い視野で選んであげることが、お子さんにしてあげられる力強い受験のサポートのひとつとなる。

また、志望校への“合格”という結果だけではなく、中学受験にチャレンジすることや、そのために目標を持って努力していくことを通して、お子さんが強く、逞しく成長していくことと、その姿を見ながら、親がわが子にびったりと併走してサポートしてあげられることが、中学受験の大きな意義でもある。現にそれは、すでにお子さんの中学受験を経験した多くの保護者が経験談として語っていることだ。

そうやってわが子の中学受験と、そこまでのプロセスを価値あるものとして理解し、受けとめることができれば、入試でも必ず満足できる結果が得られるはず。たとえ第1志望ではなかったとしても、親子とも納得の行く併願校に合格して進学したケースで



2015年入試では約6千人の志願者を集めて最大規模の入試となった1月10日の栄東中A日程の入試風景。

は、ほとんどの保護者が「良い学校に進学させてあげることができてよかった」と、その受験体験を懐かしく語ってくれる。これが「受かった学校がその子にとっての一流校」と言われる理由でもある。

親子でそういう「中学受験ならではの」価値ある体験ができて、わが子が楽しく充実した中高6年間を過ごすことができれば、保護者として、これに勝る喜びはないはずだ。

中学受験は「親子の二人三脚で挑める」最初で最後の受験チャンス。親がリードする小学校受験や、本人が主体の高校受験とは違った達成感や充実感が得られるのが、中学受験ならではの魅力なのだ。

### 日本の教育の転換期を迎えた2017年入試は、「21世紀型の」教育観・学力観が焦点に！

そして、これからほぼ1年後に現5年生が挑む2017年の首都圏中学入試は、また大きな転換期を迎える。前回のレポートでは、わが子が来年の春、中学に入学して、中高の6年間を経て大学や大学院を卒業して社会に出る2027年以降、私たち大人の知らない近未来の社会はどのように変わっていくのかについて触れた。

米国のキャシー・デビッドソン教授による「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」という予測や、英国のオックスフォード大学で人工知能などの研究を手がけているマイケル・A・オズボーン氏による「今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い」という予測を紹介し、近い将来、AI（人工知能）の急速な進化によって、いまの社会に存在する約半数の職業が機械化される可能性が高いという、近未来の社会のあり方を考えていただいた。

その後、先のオズボーン氏と共同研究を進めてき



2015年入試では約2700名の志願者が幕張メッセに集った1月20日の市川中（第1回）の入試風景。

た野村総合研究所から、この可能性を日本にあてはめて試算した「10～20年後に、日本の労働人口の約49%が、技術的には人口知能で代替可能に」という推計結果が12月2日に公表された。先の英国での発表より2パーセント上昇している点も見逃せない。

いま、「2020年大学入試改革」に象徴される日本の大学入試と教育の変化に対して、大学・高校教員と受験関係者の間では、賛否両論、喧々囂々の議論が巻き起こっている。

しかし、その大きな変化の最初の時期に直面する現在の小学生の保護者の意識は、その「2020年大学入試改革」だけではなく、すでにその先の未来を見つめている。

だからこそ、三田国際学園や開智日本橋学園などに代表される「21世紀型教育」推進校が、昨春2015年入試では爆発的ともいえる人気を集めたのである。そして今春2016年入試に向けても、この両校はもとより、かえつ有明や工学院大学附属、順天などをはじめとした多くの「21世紀型教育」導入推進校と、富士見丘、順天、佼成学園女子、昭和女子大学附属昭和などの「SGH（スーパーグローバルハイスクール）」指定校、大妻中野、東洋英和女学院、湘南学園などの「SGHアソシエイト」校などに注目が集まりつつある。

また、現小5のお子さんが中学入試に挑む来春



## 日本の教育が大きな転機を迎えた現在、2017年には新たな“中学受験ブーム”が拡大！

～ 2015年から再び上向いた中学入試が、2017年入試では新たな市場の拡大へ！～

### 私学と公立の学校が激しく変化するなかで、より良い進学先を探し出そう！

すでにこの1月上旬から本格的に火蓋を切った2016年の首都圏中学入試。とくに入試前半戦の1月入試は、この1～2年の傾向を受け継ぐ形で、大変活気づくことは間違いない。

あとのページのコラムで紹介したように、この10数年間の新たな私立中高一貫校・公立中高一貫校の誕生や改革の動きは激しいものがある。この間、大学付属・系列校では、大きな改革の動きが相次ぎ、これと対抗するかのよう、系列・併設の大学を持たない中高一貫の進学校でも、自校の教育プログラムや学び



2015年入試では大きな人気を集めた話題を呼んだ三田国際学園中の入試風景。

のスタイルを進化させる教育改革・入試改革を推し進めてきた。

そして来春2017年にも、横浜サイエンスフロンティアという新たな公立中高一貫校が誕生する。そうした動きの相乗効果により、来春2017年の首都圏中学入試の情勢にもまた大きな変化が生まれることは必至だろう。

昨年2月以降にマスコミ報道でも盛んに取り上げられるようになった「2020年大学入試改革」は、現在の小学生のお子さんが嫌でも直面する問題だ。それだけに、多くの私立中高一貫校はこうした転機に、自らの教育をさらに充実・発展させていこうと自助努力をすることで、再び受験生と保護者の注目を集めることが予想される。そうした私学の動きが、再び中学受験を活性化する期待が十分に感じられるようになってきたのだ。

現段階でいえることは、現5年生のお子さんが挑む来春2017年の中学入試は、また新たな熱気や受験規模のもとで、再び受験率が高まるだろうということだ。

このレポートで述べたような日本の教育の大きな変化をはじめ、新たな教育をめざす私学の人気増加や、多様な選択肢の広がり、潜在的な受験者層を新たに中学受験に注目させることにつながり、わが子を2017年入試にチャレンジさせようとする家庭が、さらに増加に向かう可能性も高い。

そういう意味で、お子さんが挑戦する再来年2017年の中学入試では、なおさら「価値ある合格」のチャンスが広がってくと考えてよいだろう。

2017年の4月からは、芝浦工業大学中・高等学校が、現在の板橋から豊洲の新キャンパスに移転し、同時に校名は芝浦工業大学附属中・高等学校と変更され、中学入試科目も「国・算・理」の3教科に変更されることがすでに公表されている。さらに中学からの一貫生は男子校のまま、高校では25～30名程度の「理工系進学希望」の女子を受け入れ、1クラスだけ共学クラスが誕生する。

そして首都圏でも数少ない理工系大学として「SGU（スーパーグローバル大学）」にも指定され、最先端の研究でも成果をあげている芝浦工業大学との連携教育も推し進めていくという。

今春2016年の入試では、全体に再び「大学付属校の人気上昇」が目立っているが、こうして私立大学の付属・系列校も、日本の教育が変わろうとしているいまだからこそ、より個性化・進化しようとしているのである。

また、文部科学省が大学だけでなく小・中・高でも導入を推進しようとしている「アクティブラーニング」も、今後それぞれの教育現場で急速に実践されていくことだろう。

現行の「大学入試センター試験」に替わって、2020年から導入される新テストのひとつ「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握するためのもの。

それは年に複数回の実施と、CBT方式での実施を前提に開発され、教科・科目の枠を超えた思考力・判断力・表現力を評価するため、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせで出題されるという。さらに「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を実現するための力を評価する、PISA型の問題を想定」とされている。

こうした新たな大学入試制度が導入される目的

## 5年生の学習を乗り切ったことを自信に、6年生の学習リズムを上手くつくっていこう！

～テストでつまずいたときには、5年生の教材を振り返って確認しよう！～

### 受験勉強のひとつのヤマ場は5年生。 その時期を乗り越えたことに自信を持とう！

いよいよ1月10日を迎え、埼玉入試がスタートした。すでに1月初旬から茨城エリアなどを皮切りに2016年首都圏中学入試が始まっていたが、最初のヤマ場を迎えたことになる。現5年生のお子さん方が入試を迎える来春2017年入試までは、ちょうど1年と少し。それゆえ、ほとんどの進学塾では、この2月からの1年間を新6年生の新年度と位置づけている。

やがて2月に入り、各塾での新6年生になると、来春の入試本番に向けて、本格的な学習に入っていくことになる。これまで上手くリズムをつくってこられたお子さんは、そのまま気を抜かずステップアップを図ればよい。逆にこれまでいまひとつ波に乗り切れなかった場合でも、この期を節目に、心機一転、いいリズムをつくっていけるよう工夫すればよい。

この先の受験勉強を決して怖がることはないし、焦る必要もない。進学塾のカリキュラムは、6年生の夏休み前までにひと通りの範囲を終えるのが一般的で、夏前の一時期と、その後の夏休みが最大の“ヤマ場”だといわれる。しかし、実はそれ以前に新6年生の皆さんは、すでに受験勉強の大きな“ヤマ場”である5年生の時期を立派に乗り切ってきたのである。

3年生の後半や、4年生のはじめから受験勉強に取り組んできたお子さんでも、5年生のはじめのころは、急速にいろいろなことを吸収するのが大変だったのではないだろうか。ましてや5年生から受験勉強をはじめたようなケースでは、何とかリズムに乗れるようになるまで、かなり苦勞をしたことと思う。

つまり、ここまで努力を重ねてきたお子さん方は、たとえば個々にはさまざまな課題が残されているとしても、「これまでよくがんばってきた」という自信を持っていい。そしてその自信とともに、昨年7月から5回の「統一合判」で確かめることのできた課題を胸に刻んで、このあとのステップを堂々と踏み出してほしいのだ。

### 5年生で学んだことをときに振り返り、 6年生での学力アップのステップに！

そして、これからの1年間の本格的な受験勉強をうまく消化・吸収していくうえでのコツは、とこところで5年生のときに学んだことを振り返り、それを確実なものにして、6年生の学習での課題に生かしていくことだ。

よく「困ったときには5年のときにやったことを振り返れ」といわれる。しかし、順調に学習を進められているときにも「5年生のときの学習を振り返る」ことで効果があがることも多いということを強調しておきたい。

どの塾でも、あるいは市販教材でも、中学受験のためのカリキュラムは、各教科とも多かれ少なかれ、学年をまたがった「スパイラル（螺旋型）構造」になっている。

これまでにお子さん方が学んできたことは、今後、形や切り口を変えて、入試までに2度～3度と目にすることがあるはず。そのときどきに、自分の消化度合いに応じて、5年生までに学んだことを振り返り、その知識を確実なものにしつつ、応用力・思考力を伸ばしていくことが、この6年生の学習での大切なポイントなのである。



2015年11月29日に行われた小6「最新難関模試」の風景。5年生にはこれから毎回の模試で課題を見つけて、来春の入試に向かう力を育てていってほしい。

は、この先の世界、社会で生きていくために求められる課題発見・問題解決の力を育てるためであり、そのベースにある理念は、従来の高校教育や大学入試（＝日本の教育）で重視されてきた知識修得型の学力観、教育観を大きく変えてしまうものでもある。「日本語IBプログラム」やアクティブ・ラーニングの導入推進の背景にも、こうした考え方がある。

そうした変化のもとで、たとえば「21世紀型教育」「世界標準の教育」ともいわれる学びのスタイル（IBプログラム、双方向型・対話型、PBL・PIL、ICT授業の導入など）を中高6年間一貫教育のプログラムに取

り入れる私学が、来春2017年入試に向けても急速に増えていくことも予想される。

そうした教育をめぐる状況の大きな変化のもとで、来春2017年入試で、わが子にとって良い学校を選び出せるように、ぜひ保護者は情報収集のアンテナを研ぎ澄ませていただきたい。

そして同時に、来春2017年入試での、わが子の“合格”への突破口を見出せるよう、いい形で新6年生としての受験準備の歩みをスタートさせていただきたいと願っている。

## 動く！ 変わる！ 増加する公立中高一貫校と「21世紀型」教育を標榜する 私立中高一貫校の動きが入試地図をさらに活性化。

～ 2017年の首都圏中学入試でも、新たな教育を行う私学の変化・進化が人気を左右する！～

### ●公立中高一貫校の増加を受け 私学VS公立の人気動向はどう変わる？

ここで現小学校5年生のお子さん方が挑む2017年入試の状況を変化させる大きな変動要因について確認しておきたい。

すでに2005年から2014年にかけて、東京都内には計11校、千葉には2校、埼玉には2校、神奈川には4校の公立中高一貫校が新設された。さらに今春2016年には千葉に県立東葛飾高校を母体とする中学校が開校し、翌2017年には神奈川の横浜市立サイエンスフロンティア高校に附属中学校が開校する。

こうした影響で多くの潜在的受験生層が掘り起こされ、私立中高一貫校を含めた入試地図が変化することになるだろう。

### ●三田国際学園、開智日本橋学園、かえつ有明、順天、聖学院など「21世紀型教育」を標榜する私学が人気増加へ。

今春2015年入試では、東洋大学京北（旧・京北。東京都文京区）、三田国際学園（旧・戸板。東京都世田谷区）、開智日本橋学園（旧・日本橋女学館。東京都台東区）の3校が共学化し、校名も変更して新たな歴史をスタートさせた。そしてこの3校はいずれも高い人気を集め、「台風の目」となった。

そのうち三田国際学園は、リベラルアーツ教育を実践して思考型の学びを追求する本科と、一条校でありながらインターナショナルクラスを併設。インターナショナルクラスでは、ネイティブスピーカーによるイマージョン教育を行う。アクティブラーニングをすべての授業で取り入れて、独自のグローバル教育を着々と実践しつつある。

同じく開智日本橋学園は、グローバルリーディングクラス（インターナショナルコース）と、リーディングクラス、アドバンスドクラスを併設。21世紀型学力（探究力・創造力・発信力）を育成するためにアクティブ・ラーニングを推進、イマージョン教育も導入し、グローバルリーディングクラスでは、国際バカロレアのMYP（中等教育プログラム）とDP（大学進学に向けたディプロマプログラム）も導入予定だという。

この両校は、2015年に続いて今春2016年入試でも大人気となることがすでに予想され、注目度はますます高まっている。

この背景には、本レポートでも触れた「2020年大学入試改革」への注目があり、今後（2030～2045年の）社会で求められる力が大きく変化し、その時代に生きる力を培うために、日本の教育全体が大きく変わる節目を迎えたことへの保護者の意識変化がある。

三田国際学園や開智日本橋学園のほかに、かえつ有明（東京都江東区。共学校）では、帰国生の受け入れを積極的に進め、独自の「感性教育」を謳いつつ、「IBプログラム」にある「TOK（Theory of Knowledge=知の理論）型」の哲学授業をオールイングリッシュで行うなどの「21世紀型学習法」を次々に導入～実践しつつある。

また、工学院大学附属中（共学校）では今

春から日本初のハイブリッド・インタークラスを開設。文化学園大学杉並では、やはり今春から高校にダブルディプロマコースを開設した。

このほかにも、「21世紀型教育」といわれる新しい学びのプログラムをすでに導入～実践する海城、立教女学院、大妻中野、山脇学園などの人気校をはじめ、聖学院、桜丘、順天、聖徳学園、土浦日本大学中等教育学校、共立女子、佼成学園女子、東京女子学園、富士見丘、八雲学園など「21世紀型教育を創る会」校の人気の増加が大いに注目されている。

### ●山脇学園、大妻中野をはじめ56校が一般入試に英語を導入。2017年入試でも英語入試が増加へ！

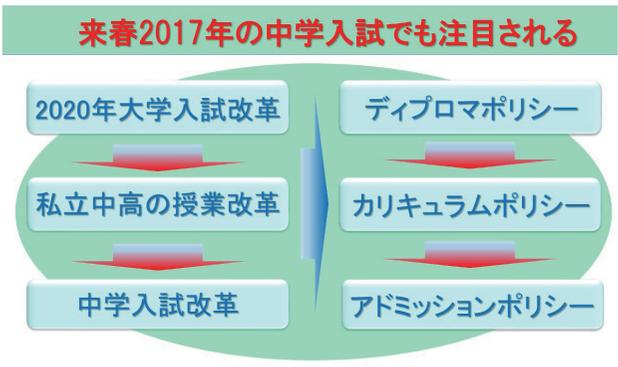
昨春2015年入試では、東京都市大学付属（東京都世田谷区。男子校）、東京都市大学等々力（東京都世田谷区。共学校）、桐蔭学園（神奈川県横浜市。男女併学校）という、それぞれ人気の高い私学が、中学入試（一般入試）に「英語（選択）入試」を新たに導入し、他の私学も合わせて首都圏で33校が「英語入試」を実施した。

そして今春2016年入試では、山脇学園や大妻中野という女子の人気校が新たに「英語（選択）入試」を導入するほか、さらに同様の英語入試を導入する私学が増え、最終的には計56校（11月末現在調べ）が何らかの形で「英語（選択）入試」を実施する。

なかには筆記試験を実施せず、英語での面接やグループワークで受験生の英語力や意欲を評価する私学や、英検取得者への特待生制度を導入する私学も現れ、英語経験者・英語既習者の受け入れの門戸がますます広がっている。

この背景には、「2020年大学入試改革」によって、従来の日本の英語教育の課題とされてきた「聞く・話す」も含めた「英語の4技能」を総合的に評価するために、英検やGTEC-CBT、IELTS、TEAP、TOEFL-iBT、TOEICなど、民間の資格・検定が導入されるという動きの影響がある。

現在の小学校5年生が挑む来春2017年入試でも、中学入試に英語を導入する動きはさらに加速し、中学入試全体の人気動向に与える影響も少なくないだろう。



「2020年大学入試改革」の影響による私立中高の教育や入試形態の変化は、今後の大立に求められている各ポリシーにもつながる

## 2005～2018年の公立中高一貫校の新設と私立中高一貫校の変化〈抜粋〉

振り返れば、2005年から2014年にかけての10年間は、「公立中高一貫校新設ラッシュ」の時期で、私学にも数々の動きが起きている。この先2018年までの動きを紹介したい。

- 2005年（現・大学卒業1年目の中学受験時）
  - ・都立白鷗高等学校附属中学校が開校
  - ・東京農業大学第一（共学校）が中学を開校
  - ・淑徳与野（女子校）が中学を開校
  - ・大宮開成（共学校）が中学を開校
  - ・浦和実業学園（共学校）が中学を開校
- 2006年（現・大学4年生の中学受験時）
  - ・都立小石川中等教育学校が開校
  - ・都立両国高等学校附属中学校が開校
  - ・都立桜修館中等教育学校が開校
  - ・千代田区立九段中等教育学校が開校
  - ・本庄東（共学校）が中学を新設
  - ・白梅学園清修（女子校）が中学を新設
  - ・かえつ有明（嘉悦女子）が校地移転、校名変更して共学化
  - ・日出学園女子が校名変更し、共学化
- 2007年（現・大学3年生の中学受験時）
  - ・さいたま市立浦和高等学校附属中学校が開校
  - ・千葉市立稲毛高等学校附属中学校が開校
  - ・法政大学第一（男子校）が共学化し、法政大学中学校と校名変更。三鷹市牟礼に校地移転
  - ・宝仙学園（女子校）が中高一貫の共学部「理数インター」を併設
  - ・順心女子学園（女子校）が広尾学園と校名変更し、共学部を併設
  - ・東京学芸大学附属大泉が国際中等教育学校に
  - ・横浜富士見丘が校地移転、横浜富士見丘学園中等教育学校に
  - ・東海大学付属高輪台が中学を新設
- 2008年（現・大学2年生の中学受験時）
  - ・都立立川国際中等教育学校が開校
  - ・都立武蔵高等学校附属中学校が開校
  - ・千葉県立千葉中学校が開校
  - ・明治大学付属明治（男子校）が共学化。西調布へ校地移転
- 2009年（現・大学1年生の中学受験時）
  - ・神奈川県立相模原中等教育学校が開校
  - ・神奈川県立平塚中等教育学校が開校
  - ・日本大学藤沢（共学校）が中学を開校
  - ・東京農業大学第三（共学校）が中学を開校
  - ・目白学園が共学化し、目白研心と校名変更
- 2010年（現・高校3年生の中学受験時）
  - ・都立富士高等学校附属中学校が開校
  - ・都立大泉高等学校附属中学校が開校
  - ・都立南多摩中等教育学校が開校
  - ・都立三鷹中等教育学校が開校
  - ・早稲田大学高等学院（男子校）が中学を開校
  - ・中央大学附属高校（共学校）が中学を開校
  - ・郁文館（男子校）が共学化
  - ・成立学園（共学校）が中学を開校
  - ・昌平（共学校）が中学を開校
- 2011年（現・高校2年生の中学受験時）
  - ・横浜山手女子が中央大学の附属校化。中央大学横浜山手学園に校名変更
  - ・横浜国際女学院翠陵が共学化し、校名を横浜翠陵に
  - ・目黒学院が共学化
  - ・千葉明德（共学校）、二松学舎沼南（共学校。現校名は二松



2017年4月から豊洲キャンパスに移転する芝浦工業大学中高の新校舎完成予想図。校名も

- 学舎大学附属柏）、開智未来（共学校）が中学を開校
- 2012年（現・高校1年生の中学受験時）
  - ・中央大学横浜山手（横浜山手女子）が共学化
  - ・横浜市立南高等学校附属中学校が開校
  - ・八王子学園八王子（共学校）、西武台新座（共学校）が中学を開校
- 2013年（現・中学3年生の中学受験時）
  - ・中央大学横浜山手が横浜市営地下鉄「センター北駅」近くに校地移転。校名を中央大学附属横浜に変更
  - ・埼玉県内に、武南（共学校）、東京成徳大学深谷（共学校）、狭山ヶ丘（共学校）、国際学院（共学校）の4校が中学を開校。
  - ・茨城県立古河中等教育学校が開校
- 2014年（現・中学2年生の中学受験時）
  - ・川崎市立川崎高等学校附属中学校が開校
  - ・安田学園（男子校）、新渡戸文化（女子校）が共学化
- 2015年（現・中学1年生の中学受験時）
  - ・京北（男子校）が白山の新キャンパスに校地移転し、共学化。校名を東洋大学京北に
  - ・東洋大学牛久が中学を開校
  - ・戸板（女子校）が共学化し、校名を三田国際学園に変更
  - ・日本橋女学館（女子校）が共学化し、校名を開智日本橋学園に変更
  - ・工学院大学附属がハイブリッドインタークラスを開設
  - ・文化学園大学杉並が高校にダブルディプロマコースを開設
- 2016年（現・小学6年生の中学受験時）
  - ・千葉県立東葛飾高等学校附属中学校が開校
  - ・法政大学第二（男子校）が共学化
  - ・本庄第一（共学校）が中学を開校
  - ・横浜英和女学院（女子校）が青山学院大学の系属校となり、校名を青山学院横浜英和（仮称）と変更（→2018年に共学化予定）。
- 2017年（現・小学5年生の中学受験時）
  - ・横浜市立サイエンスフロンティア高等学校附属中学校が開校予定
  - ・芝浦工業大学中高が豊洲へキャンパス移転
- 2018年（現・小学4年生の中学受験時）
  - ・青山学院横浜英和が共学化予定

こうした変化のなかで、公立学校の教育の枠組みがどう変わり、私学の教育がどう進化（深化）していくのかを、しっかりと見つめたいと、お子さんの進路を選びとってほしいと思う。